

## チルコロ・マンドリニスティコ・フローラ

### マンドリンとともに45年

イタリア語で「マンドリンを弾く花の精（女神）のつどい」という意味をもつ「チルコロ・マンドリニスティコ・フローラ」。主宰の高橋五郎さんが1965年にこのマンドリンクラブを結成した当初、20人ほどの団員がほとんど女性だったことや、マンドリン発祥の国・イタリアで師事した先生からの勧めもあって、このゆかしい名前が付けられたそう。

「周りからは呼びにくいって言われるけど」と高橋さんは苦笑いするが、名前に戴いた女神に見守られてか、長きにわたって演奏活動を続け、今年で創立45周年を迎えた。

#### ◎厳しくも楽しい練習

土曜日の全体練習にお邪魔した。部長の大内さんから、「先生の指導はビシビシ厳しいですよ」と聞かされていたので、固唾を呑んで様子をうかがう。定刻となり、指揮棒が振りおろされ、団員の指がいっせいに動き出す。

「男の人は女の人をしびれさせるように、女の人には男の人をしびれさせるように！」

「弱いと同時に、やわらかい感じの音がほしい。やわらかくても、鈍くならないように」

「百年前からこの曲を知ってるような演奏をしないと」

難しい注文が出されるたびに、全体に緊張が走る。しかし、練習は不思議に軽やかなムードで進む。団員が独自の見解による曲の解説を披露したりして、笑いも起こる。いつの間にか、チルコロ・フローラの世界に引き込まれていた。

途中、コンサートマスターの松野さんをはじめ、何人かに「マンドリンの魅力は？」と質問したところ、異口同音に「明るくて美しい音色」という答えが返ってきて、さすがイタリアの楽器だと納得。だが、練習中に伝わってきた雰



主宰の高橋五郎さん

囲気は、その音色によるものだけではなさそうだ。クラブで最年少の大学生、山内さんがこんなことを言っていた。

「チルコロ・フローラの良さは、指導者とメンバーが意見を言い合って、〈互いに演奏をしている〉という感じがもてるところ。楽しいので、長時間の練習でも飽きません」

練習のあいだ、団員たちの視線は、日本人離れした快活さを持ち、イタリア人から「あなたは何人だ？」と尋ねられたことがあるという主宰に注がれる。

#### ◎思いが人を呼び寄せる

高橋さんがマンドリンに出合ったのは12歳のとき。大学生の兄が所属するギタークラブ

現在、団員は70代から10代までの約40人。管弦楽のオーケストラ同様、第1・第2マンドリン、マンドーラ、マンドロンチェロ、マンドローネ、ギター、コントラバスというパート編成がある



の楽器を高橋家で預かることになり、そのなかにマンドリンがあった。「他のあらゆる楽器をもって表現できない響き」にとりつかれ、以来、半世紀。

マンドリンの可能性を求めて、ピアノ、箏、ハープ、マリンバ、二胡、琵琶、声楽などとのコラボレーションにも意欲的に挑戦してきた。「やってみないとわからないからね。やってみると思わぬ結果が出て、また新しい世界が広がっていくんです」という高橋さんの思いが人を呼び寄せるのか、最近では、かのパヴァロッティの最後の弟子であるテノール歌手、アンドレア・C・コロネッラさんがご自身から共演を熱望してきた。高橋さんが「諸々の事情で何度かご辞退したんだけど（笑）」、イタリア人の情熱に負け、来たる10月の45周年記念演奏会で招聘することに。同演奏会にはマンドリンが盛んな大阪からも合奏団を迎え、多彩なプログラムを予定している。「(コロネッラ氏に押し切られたのは)先生のイタリア語が通じなかったからです……」「おかげで練習が大変なんですよ」と団員から泣きが入るが、冒頭のような練習風景を見れば、心配ご無用である。

### ◎仙台とマンドリンのゆかり

「マンドリンは大衆的な楽器だと思われて

いるけれど、ヴィヴァルディやモーツァルト、ベートーヴェンなどもマンドリンの曲を残していて、歴史的には“栄光の楽器”なんですよ」と高橋さんから楽器の歴史を教えていただいていると、驚いたことに、明治時代に日本で初めてマンドリンを演奏した人物は、仙台出身の音楽家・<sup>しかまとつじ</sup>四竈訥治だという話題も飛び出した。マンドリンと仙台にそんな意外なゆかりがあるとは、どれだけの市民が知っているだろうか？「近頃、マンドリンをもっと多くの人の共感を呼べる楽器にしたいという使命感を感じています。若い頃は、マンドリンを弾いている自分が好きだったんだけどね（笑）」と高橋さん。「いい家族。宝物です」というチルコロ・フローラの仲間とともに、これからもマンドリンの魅力と可能性を追い求める。



高橋さんを支える委員の方々 後列左から部長の大内さん、運営委員の渡辺さん、演奏会実行委員の赤間さん

▶▶▶「チルコロ・マンドリニスティコ・フローラ創立45周年記念演奏会」のページ(「仙台市民の文化事業」PRページ 17)もご覧ください